名護市長選－「陰の勝者と陰の敗者」

毛利 孝雄（沖縄大学地域研究所特別研究員）

「陰の勝者は安倍政権、そして陰の敗者はこの国の民主主義」－『沖縄タイムス』の阿部岳記者は、名護市長選の結果について２月５日付の同紙でこう書いています。重い指摘です。

何より自覚が求められるのは、選挙結果の一義的責任は、安倍政権の辺野古強行を許してしまっている、本土側の運動の弱さと「黙認」する民意だということではないでしょうか。

■多くの市民が花道で送る

稲嶺進(前)名護市長の退任式が行われた２月７日、市庁舎前には４００人を超える市民が駆けつけ、花道をつくりました。

稲嶺市政の８年間は、辺野古新基地阻止を貫くとともに、米軍再編交付金に頼らない市民の叡知と自治の力による市政をめざし、全学校への冷房設置や校舎の耐震化、小中学生の医療費無料化などを実現してきました。

市庁舎前の光景は、住民自治を担う多くの自立した市民の誕生を印象づけるものでした。

■民主主義の対極だった市長選

名護市長選は、住民自治や民主主義とは全くの対極にある選挙でした。

渡具知氏は、最大の争点とされた辺野古新基地にはひと言も触れず、公開討論にも一度も応じませんでした。一方で、期日前投票が投票総数の６割近くという異常さ、それは有権者の自由な意思の表明という選挙制度の根幹にも関わるものです。

そして、稲嶺市政に対峙したのは、安倍政権そのものでした。

そもそも民主主義国家なら、少なくとも４年前の稲嶺市長再選、その後の翁長県知事誕生の時点で辺野古工事はストップしなければならないはずです。安倍政権は「唯一の解決策」として工事を強行し、抗議活動には海保や県外機動隊までも投入した弾圧体制で応えました。既成事実を積み上げ、後戻りできないことを印象づけ、あきらめさせる。そして、現実を容認さえすれば、再編交付金の過去にさかのぼっての支給まで約束する。国策の前に抵抗は無意味だと、あらゆる手を使っての介入が、人口６万の一地方都市の懸命の努力を踏みつぶしていったのです。

■辺野古を可視化する現場の闘い

一方で、辺野古工事が順調に進んでいるわけではありません。進捗率は未だに数%。工事が違法行為の繰り返しと積み上げであることも変わりません。選挙結果による違法行為の免罪などもってのほかです。また、埋立海域に広がる琉球石灰岩地質の脆弱性や活断層存在の可能性は、今後、埋立そのものの是非を問うことにもなる問題です。

ゲート前そして海上の現場での闘いは、これら辺野古工事の現状と問題点を可視化するとともに、沖縄に心を寄せる国内外の人びとをつなげてきました。西日本各地からの辺野古埋立土砂搬出に反対する運動、本土機動隊の沖縄派遣の違法を問う住民訴訟、東京ＭＸテレビなど沖縄ヘイトに対する闘いなど本土側の運動の広がりは、辺野古の現場がつなぐ人びとのネットワークがあって可能でした。

ひとりでも多くの人に、辺野古の現場を訪ね体感してほしい。

■11 月県知事選へ

11 月県知事選は、沖縄の民意と日米同盟が正面から対峙する闘いになります。安倍９条改憲は沖縄の一層の軍事要塞化と一体に進んでいます。沖縄との連帯を結び直すことができるか。問われているのは、本土側の平和・人権・環境・自治・国際連帯など、あらゆる分野で沖縄に心を寄せる人々の英知を結集した運動ではないでしょうか。